

大西民子の服飾観

Tamiko Ohnishi's View of Costume

大久保 春乃
(Haruno OKUBO)

キーワード：大西民子、服飾観、洋裁、編み物、短歌

Key Words: Tamiko Ohnishi, View of Costume, Dressmaking, knitting,
Japanese poem of thirty-one syllables

I はじめに

大西民子（1924 - 94）は生涯に歌集・歌書を15冊出版した他、多くの共著を持つ、昭和を代表する女流歌人の1人である。その業績は、短歌研究賞・迢空賞・詩歌文学館賞等の受賞により、高く評価されている。一方実生活においては、服飾へ深い関心を寄せ、洋裁や編み物の技術にも長けていたことから、服飾に関する多くの短歌作品を残している。

民子にとっては、単に着ること、装うことのみならず、縫うことや編むこと、また、布地や糸といった材料、あるいは針や鋏といった道具も、重要な歌材であった。民子はそうしたものを丹念に詠う営みを、25歳で木俣修の門を叩いて本格的な作歌を始めてから、69歳で急逝するまで、生涯続けたのであった。

民子の作品に関しては、生前・没後ともに、多くの評論が発表されている。

生前に書かれた民子論の代表的なものには、『大西民子全歌集』¹⁾に収録された緒論がある。それらは、上田三四二・金子兜太・中村稔・生方たつゑ・木俣修・小野興二郎・三枝昂之、吉野昌夫による、懇切な作品評であり、歌集評であった。それから5年後の民子の急逝にあたっては、「短歌」、「短歌研究」等、多くの誌上で追悼特集が生まれ²⁾、民子の人と作品が多角的に論じられた。その後は、原山喜亥の編集により、写真（大西民子アルバム）・代表歌100首・各界諸氏の回想文・年譜をもってまとめられた『青みさす雪のあけぼの—大西民子の歌と人生』³⁾が、また、晩年の民子をよく知る有本俱子執筆の『評伝大西民子』⁴⁾等が出版された。没後20年の節目にあたっては、「短歌現代」誌上において「大西民子没後20年」⁵⁾という特集が生まれ、真鍋正男の「大西民子論」のほか、7人の歌人が「歌人・大西民子」を論じ、10歌集の解題と年譜がまとめられている。このようにして、民子の作品の分析のみならず、人となりや人生全般についても、その詳細が明らかにされてきた。

しかし、民子の歌と服飾との接点は、ほとんど論じられていない。唯一、民子の追悼文の中

に、生前親交のあった歌人北沢郁子の、次のような一文が見られた。民子の歌を2首、「今はただミシンを踏まむ石ころのやうにころがり落ちてもゆけず」（『雲の地図』）と「縫ひものをなすほかあらぬ一日と決むればやさし精出でてをり」（『野分の章』）を引いた上で、「民子さんの縫い物はまた心の深いところで孤独と向き合い、ひとり堪えるのに恰好な手だてでもあったのだ。本心をのぞかせる優しい歌を残している」⁶⁾と述べている。しかし残念ながら、北沢はこの先を論じていない。

あらためて民子の歌を読んでもみると、生前に出版された9歌集および遺歌集、全10冊の歌集に収録された歌の総数は、4897首であった。そして服飾に関する歌は、そのうちの298首にも及ぶのである。

民子はどのような思いで、服飾に関する多くの歌を詠み続けたのだろうか。北沢郁子が、「本心をのぞかせる優しい歌」と評した歌は、実際にはどのようなものだったのか。それは、第二次世界大戦の前後から現代へと至る時代の中で、どのような意味を持つのだろうか。本稿ではそうした点に思いをいたしつつ、大西民子の服飾観を明らかにしてみたい。

資料としては、民子の歌については、先にあげた10冊の歌集を、また、自らの歌を解説した『自選100歌選大西民子集』⁷⁾のほか、民子について書かれた評論・評伝等、さらに、同時代の歌誌、ファッション誌等を参考とした。

Ⅱ 大西民子の歩んだ道

本論に入る前に、大西民子とはいかなる人物であったのか、人生の道のりと、著書の概要をまとめておく。

民子は大正13年（1924）、岩手県盛岡市に4人姉妹の次女（菅野民子^{かんの}）として生まれ、岩手県立盛岡高等女学校在学中から短歌を作り始めた。成績が優秀で、奈良女子高等師範学校文科に進学し、奈良在住の前川佐美雄に短歌を学ぶ。昭和19年（1944）、戦争激化により6月に繰り上げ卒業し、岩手県立釜石高等女学校教諭となった。21年（1946）、前川佐美雄が「オレンジ」を創刊し、同人となる。22年（1947）、岩手県立釜石工業学校教諭の大西博と結婚、翌年男児を早死産し、網膜剥離により半年病臥する。

昭和24年（1949）、大宮市に転居。夫婦ともに埼玉県教育局職員となり、埼玉県立文化会館に勤務する。民子はその後19年間、同館勤務を続けた。10月、木俣修に入門。28年（1953）、木俣修が「形成」を創刊し、同人となる。この頃から夫が家を出て、別居生活となる。31年（1956）、第一歌集『まぼろしの椅子』⁸⁾刊行。35年（1960）、第二歌集『不文の掟』⁹⁾刊行。39年（1964）、10年別居生活を続けた夫との協議離婚が成立する。41年（1966）、第三歌集『無数の耳』¹⁰⁾刊行。この間、埼玉県歌人会発足と同時に事務局を担当、「朝日新聞」埼玉版および「埼玉新聞」歌壇の選者を務める。43年（1968）、埼玉県立浦和図書館勤務となる。

昭和46年（1971）、第四歌集『花溢れぬき』¹¹⁾刊行。翌年、同居していた妹（菅野佐代子）が急逝する（享年40歳）。その後第五歌集『雲の地図』¹²⁾、第六歌集『野分の章』¹³⁾、第七歌

集『風水』¹⁴⁾刊行。57年（1982）、埼玉県立久喜図書館奉仕部長を最後に、公職を退く。『風水』により第16回迴空賞受賞。第八歌集『印度の果実』¹⁵⁾、第九歌集『風の曼荼羅』¹⁶⁾刊行。この間、日本芸術家協会会員となり、角川短歌賞選考委員、新聞各紙歌壇選者等を務める。

平成4年（1992）、『風の曼荼羅』により第7回日本詩歌文学館賞受賞、紫綬褒章受章。5年（1993）5月に「形成」が解散し、12月に「波濤」の創刊号を刊行するも、翌6年（1994）1月5日、心筋梗塞のため急逝。享年69歳であった。その後平成10年（1998）に、遺歌集『光たばねて』が刊行された¹⁷⁾。

Ⅲ 大西民子の歌を読む

1 縫うこと・編むこと

（1）母と妹をめぐる

大西民子の第一歌集『まぼろしの椅子』に、次の1首がある。

夜の間も人生は流れるものをとて読書に更かす夫にわれも縫ふ（『まぼろしの椅子』）

民子の師である木俣修は、『大西民子全歌集』¹⁾の「栞」において、民子の夫について、また、2人の生活について、次のように書いている。

その相手は工学を専攻した人であったが、文学青年で、せっせと小説を書いていた。（中略）夫は同人誌などに小説を書いたりしていたけれども、その作家として芽を出す日のことなどはとても考えることはできなかった。だから明敏な彼女は夫を作家に仕上げるなどというようなことに、夢を託そうなどとは思っていなかった。（中略）夜は読書に更かす夫のそばで、ものを縫うことに人生の意味を感じつつ、平凡であるが、平安なあけくれを過していた¹⁸⁾。

夜は静かに更けてゆき、夫は本を読み、妻はものを縫う。掲出歌には、そんな暮らしに、幸せと同時に、木俣修のいう「人生の意味」をも見出している民子の気持ちが素直に表現されている。

しかしその後、過酷な運命は容赦なく2人を遠ざけてゆき、『まぼろしの椅子』の代表歌である、次の1首が生まれるのであった。

かたはらにおく幻の椅子一つあくがれて待つ夜もなし今は（『まぼろしの椅子』）

生涯よくものを縫い、あるいは編み、それらを詠い続けた民子であったが、その出発点は先の1首、「夜の間も人生は流れるものをとて読書に更かす夫にわれも縫ふ」であった。

歌人の加藤克己は、民子の没後、『青みさす雪のあけほの一大西民子の歌と人生』³⁾に収録された追悼文の中で、民子の作品が「実に多くの人たちに愛された」ことを指摘した上で、その理由について次のように述べている。

一つは夫の失踪という悲劇的な、悲傷的な境遇への同情。ドラマティックな生き方への心惹かれがある。その事に堪えて、忍んで、悲劇を歌で美に昇華させた、この事はまさしく大西短歌の魅力の根底をなしている。（中略）歌は技巧的に熟練し、その結果、読

む者に、悲しみは悲しみなりに、充足感をもたらす歌を多く作った。負を正に高めて、ことばをもって実に、詩に紡ぎおおせたのである。(中略)

ただ大西民子は、社会も時代も、思想も歌おうとせず、周辺の些事をていねいに己れの心にひき入れて、自分の心の歌に仕上げていった。歌を抒情一点にしぼって、短歌伝来の美をより秀れたものに仕上げていった、ということなのである¹⁹⁾。

引用文の後半で加藤が述べている、「周辺の些事をていねいに己れの心にひき入れて、自分の心の歌に仕上げていった」という点に注目したい。縫うこと、編むことは、まさに加藤の言う「周辺の些事」に当てはまる。それが「心の歌」となって、読者の心にまっすぐに届くのである。実際に民子は、縫うこと、編むことについて、どのような「心の歌」を詠んだのだろうか。

民子を見守った肉親として、大きな存在が、母と妹であった。その二人にまつわる歌を、初めに母の歌からあげてみよう。

コートなど縫ふに紛れてあるさまを見届けて母は帰りゆきたり (『まぼろしの椅子』)

どんな時に縫ひものなどをするわれか知りぬむ母のたちると思ふ (『不文の掟』)

冬となる日々ながく病院に通ふべき母のため今宵も脚絆編みつぐ (『まぼろしの椅子』)

集め毛糸の脚絆なれどもはきて見つ母の眼に光る涙を見たり (『まぼろしの椅子』)

と解き毛糸蒸す片方より巻き呉る母をたのしますること少なし (『不文の掟』)

待望の子ども、男児を授かったものの死産してしまう。その後転居して職を得たが、夫は家を出たまま帰る気配もない。独りで暮らす民子を案じて、折々母と妹が訪ねてくる。

掲出の1首目は「暗き季節」と題する一連の中の1首で、前後の歌は「思ひあぐねて幾夜眠らぬわれの名を幼く呼びて妹は来ぬ」と、「いつまでも明けおく窓に雨匂ふもしや帰るかと思ふも寂し」であった。「もしや」と思いつつ、帰らぬ夫を待ち続ける日々である。母としては、娘の、「コートなど縫ふに紛れて」悩む姿が不憫でならない。掲出の2首目も同様である。娘が「どんな時に縫ひものなどをする」のか、その心情を知り尽くしているために、娘の気持ちを逆なでしないように、しづかに「たちる」をする母である。そうした母の心遣いを痛いほど感じつつ、民子はひたすらにものを縫い、編み、詠い続ける。

掲出の3首目と4首目は、脚絆を編む歌である。「病院にて」という同じ一連の中には、「手術後の眠りにおちし母の顔生えぎはにうすく汗はにじめり」や「働きつつ貧しき日々よ棄てばちの生き方のふと美しく見ゆ」もあった。掲出歌は、退院後の母のために脚絆を編んでいる場面だが、4首目から、それが「集め毛糸」であることがわかる。昭和20年代の終り、もののない時代である。20歳のときに父を亡くし、夫にも去られた民子の「働きつつ貧しき日々」であれば、安易に新しい毛糸は買えない。着古したセーターやマフラーをほどいては、まだ使える部分を集めておいて、靴下や脚絆といった小物を編むのである。掲出の5首目の、「と解き毛糸蒸す片方より巻き呉る」という描写から、さらにその詳細がわかる。ほどいて編み直す「解き毛糸」は、一度「蒸す」、つまり蒸気を当てることによって、編み癖を矯正し、

ふっくらとした風合いを再生するのだ。もっとも簡単なのは、ストーブの上で薬缶の水を沸騰させ、注ぎ口から立ち上る蒸気に毛糸を当てながら、どんどん巻き取ってゆく方法である。ここに詠まれているのはそんな場面ではないだろうか。

その後母を送った民子は、次のような挽歌を詠んでいる。

亡き母のくちずさみりし数へ唄古毛糸つなぐをりふしに恋ふ (『無数の耳』)

肘を張り毛糸編む癖亡き母に似て夜の部屋のガラスに映る (『無数の耳』)

亡き母のコート別れし夫の袷さまざまの端布葛籠はぎれつづらより出づ (『無数の耳』)

脚絆にしても、コートや袷にしても、既製品を買って着せたものであれば、これだけの思い入れにはならないように思う。デザインを考え、生地や糸を選び、じっさいに手指を動かして、作り上げてゆく。その過程を経てこそ、母の「数へ唄」は耳によみがえり、自分の編む姿が母に似ていることにふと気づき、「端布」にも心が動いて、1首が成るのである。それが、時間をかけてものを縫い、編むことの力であり、意味なのではないだろうか。

妹に関しては、次のような歌がある。

背高さ妹に似合ふや縫ひ終へし水色のドレスをたたみ眠らむ (『まぼろしの椅子』)

幾日もかけて縫ひやりし半コート妹は今日着て見せに来ぬ (『まぼろしの椅子』)

毛糸の玉はやさしく膝へ帰りつつ妹に編む青のストール (『花溢れぬき』)

ここに詠われている「妹」とは、7歳下の菅野佐代子である。愛する妹に、ものを縫い、編んでやれること、それを喜んで着てもらえることは、民子にとって大きな心の糧であり、幸せであったに違いない。母亡きあと、民子はこの妹と12年あまりをともに暮らし、母親のように愛情を注ぎ続けた。妹は独身のまま40歳で急逝するが、亡くなる前年に、民子は次のような歌を詠んでいる。

われに気づき右手あげたる妹に黒の手袋させゐてさびし (『雲の地図』)

あるいはこれも、民子が編んだ手袋だったかもしれない。

(2) 材料と道具さまざま

縫うこと、編むことには、さまざまな材料や道具が使われる。大西民子は、それらを歌材として多くの歌を詠んでいる。ここでは、糸、針、生地に関する歌を読み解いてみたい。

①糸

手首より襟回りよりほどかれて混沌と積もるまだらの毛糸 (『雲の地図』)

風すさぶこころすさぶと編みてゆくくぐもり易きラメの毛糸を (『雲の地図』)

仕事始めにラメの毛糸を編みをればきらめく如し未知の月日も (『風の曼荼羅』)

疑はぬことの優しさ毛糸の玉は芯まで青と決めて編みつつ (『風水』)

まず初めに毛糸の歌である。掲出の1首目は、セーターをほどく様子が詠われている。「手首より襟回りよりほどかれて」という上の句から、読者はたった今、自分の着ているものをほどかれゆくような心もとなさを感じる。第4句の「混沌と積もる」のは、そんな心の揺れ、

不安だろうか、と思えばそれは、「まだらの毛糸」であるという。現実の作業の一場面をそのまま描写したように見せながら、「混沌」や「まだら」といった語句の斡旋によって、憂いのある、鬱屈した心情を伝えている。読者の興味を結句まで引っ張って行き、最後に種明かしをする、謎解きのような構成も生きた1首と言えるだろう。

2首目で編んでゆくのは「ラメの毛糸」である。ラメが入って、きらきらと美しい反面、「くぐもり易」い。つまり、糸同士がひっかかり、絡みやすいので、毛糸玉からすこし長めに出して、指で捌きながら編み進めなければならない。そこで上の句の「すさぶ」が生きてくるのだが、注目すべきは、「風すさぶころすさぶと編みてゆく」という、リフレインを含んだゆったりとしたリズムだろう。面倒なこと、難儀なことは承知の上、それもこれも呑み込んで、私は私のペースでゆっくり進めていこうという思いが伝わって、読者の心もなぐさめられる。

3首目は、民子が自ら編集した、生前最後の歌集『風の曼荼羅』から引いた。晩年になって、同じラメの毛糸が詠われている。こちらは「仕事始め」であり、「きらめく如し未知の月日も」と、きわめて明るい。しかし、ここまで明るい語句ばかり連ねられると、それによってかえって、自らを鼓舞しているような、痛々しさも垣間見えてしまう。

4首目は怖い歌、そして哀しい歌である。編み物をしながら、編んでいる毛糸玉が芯まで同じ色であることに疑いをもつ人など、いるだろうか。民子はそれを疑ってしまう。否、疑わざるを得ない、そのように心を動かさざるを得ない境遇に、長年身をさらしてきたのである。何ごとにも疑わずにすれば、どんなに清らかに生きられることだろう。それゆえ民子は、さらに踏み込んで、「決めて」と詠う。疑ってしまう心を封じて、思い決めて、編む。「疑はぬこと」は「優しさ」なのだ、民子は一種のあこがれをもって自戒するのだ。「疑はぬことの優しさ」。二句切れで、歌はいったんすぱっと切れる。この歌は、3句以降にまったく別の事象をもってきても、1首として成立するだろう。そこを、「毛糸の玉は芯まで青と決めて編みつつ」と詠むのが、民子なのである。

針山にもつれるし糸ほぐしみてきれぎれに戻りくる記憶あり (『不文の掟』)

来し方に思ひなづさふ夜しつけいとの時間切れ易きしつけいと躰糸をつなぎて (『無数の耳』)

この2首では、縫い糸と、躰糸が詠まれている。1首目の要点は「きれぎれ」にある。もつれた糸も、戻ってくる記憶も、どちらも「きれぎれ」なのだ。2首目の「なづさふ」は、水にただようとか、人に親しむ、かかわる、なじむといった意味である。静かな夜の灯りのもと、いまとなつては「来し方」もいとおいしい。1首目の下の句は「10音・5音」、2首目のそれは「11音・4音」と、いずれも句跨りである。その大きなうねるようなリズムからは、過去と現在をつなぐ時間の渦が髣髴する。縫い糸も、躰糸も、民子にとっては、過去の時間を呼び覚ます縁よすがであるようだ。

②針

縫い針と待ち針の歌を3首ずつ読んでみよう。

夜の森を飛び立ちてゆく鳥の声もの縫ふわれは針を磨けり (『無数の耳』)

たなそこに溜まれる闇の濃くなりて針の先のみ輝き始む (『花溢れぬき』)

紅絹縫へば痛む指先折れ易き針のことなどかなしみ尽きず (『花溢れぬき』)

掲出の1首目が収録されている『無数の耳』¹⁰⁾の代表歌は、歌集名ともなった「切り株につまづきたればくらがりに無数の耳のごとき木の葉ら」や「フィルムを逆に回せばまざまざと枯れ葉まとひて立ちあがる木々」である。吉野昌夫は『大西民子全歌集』¹⁾の解題において、この歌集の歌の特徴を「目の前の対象を主観によってゆれ動かし、ゆれ動いた幻想を具象的に歌いあげる—といったねばっこいくいさがり方、(中略)自分でもつかみ切れない深層心理を探索するなど、あらゆる試みに挑戦している」²⁰⁾と述べている。掲出の1首目も、夜の森で眠っているはずの鳥がひと声鳴いて飛び立ったとき、幻想のスイッチが入ったのだ。そんな上の句をいただいて、下の句では、針を磨くのである。ものを縫う針を磨くことで、針は、もうひとつ別の用途を持ち始める。読者の背中をすっと凍らせるような、怖さの光る1首である。

2首目は、ひたすらものを縫っているのだろう。運針をするときは、指貫きのはまった中指と、薬指、小指の3本は折りたたまれ、親指と人差し指の先に針の頭が見えている。つまりたなそこは、指と布の内にすっぽりとおおわれて、「溜まれる闇」は濃くなるばかりである。それに対して針の先は、光を集めて輝きを増してゆく。闇と光の対比をどこまでも極めてはいけない、この先へ踏み出すのは危険ではないか。潮時、というようなことを、ふっと思い起こさせる。1首全体が、ひとつの暗喩のようだ。

3首目の「紅絹」は、袷の着物の裏地に用いたりするが、民子は何を縫っているのだろうか。上質の絹は、手触りはやわらかくても、目が詰んでいるので、縫ってみると意外に硬い。したがって長時間縫っていると指が痛み、木綿針に比してひときわ細い絹針は、しばしば折れる。この、きわめて説得力のある初句から第4句までが、結句の「かなしみ尽きず」を導く、序詞のような働きをしているのである。

縫ひあげてふたび寂し待ち針を色分けにして挿し直しつつ (『野分の章』)

待ち針を刺し替へをれば指先にかすかに影のゆき戻りする (『風水』)

待ち針をさし替へをれば人の世のおほよそはずでに身を過ぎてをり (『風の曼荼羅』)

以上の3首は待ち針を詠っている。1首目は、何かを縫い終わり、針箱を片付けている場面である。洋裁用の待ち針は、頭に、白、赤、黄、青、といったカラフルな丸い玉がついている。ものを縫っている最中は、待ち針をきれいに揃える余裕はないので、針山にランダムに挿してゆく。しかし縫い物が完成してみると、針山の待ち針が気になるものである。「色分けにして」というのは、それを色ごとに揃えてきれいに並べることで、裁縫をする多くの人にこの経験はあるだろう。そうしながら、縫いものに夢中になっていた間、ひととき忘れていた寂しさが思い出された。

2 首目と 3 首目は、1、2 句が共通して「待ち針を刺し替へをれば」である。何かの逡巡があって、一度刺した待ち針を刺し替えている。すると 1 首目では、その逡巡に呼応するかのように、影が行って戻るといふ。待ち針の影かもしれないし、心にかかっている人、あるいはものの影かもしれない。影の正体は明記されず、読者に委ねられている。一方 3 首目は、民子の晩年の境地だろうか。平知盛の、見るべきほどのことは見つ、が思い出される。寂寥と、その先に至り着いた諦観。ふつついた、民子の小さな息が聞こえてくるようだ。

そもそも待ち針とは、本縫いの針を待っているために、この名があるとも言われる。そんな呼称、また、洋裁用の待ち針であれば、頭に小さな丸い玉を冠した楚々とした風情、いずれをとってみても、心情をたくしたくなる道具であるようだ。

③生地

『自選100歌選—大西民子集』⁷⁾の中で、民子は洋服の生地について、次のようなことを書いている。

サラリーマンにとって、昼の休みほどたのしいものはない。浦和の図書館に勤めていたころもそうだった。気の合った同士、三々五々町に出て昼食を取り、コーヒーを飲み、書店をのぞいたりして四十五分間をたのしむ。私は洋裁店をのぞいて、布地を見たりした。気に入った縮緬でも見つかり、前後を忘れて買ってしまふのだった²¹⁾。

浦和図書館勤務となったのは昭和43年(1968)4月、久喜図書館へ異動となるまでの11年間を過ぎた。その浦和図書館で、民子の部下であった芳賀明子は、当時の民子を「素敵な生地の新しいツーピースを着てこられて、「この服は私がミシンを踏んで作ったのよ」と自慢なさったりした時の、楽しそうな顔も浮かんでくる」²²⁾と回想している。

現在とは違って家庭洋裁の盛んな時代で、町には洋裁関連の店も多く、気軽に生地を買い、縫っていたのだろう。ちょうど同じころ、民子は次のような歌を詠んでいる。

絹の裏つけて着やすく縫ひあげぬ働くときにまとふブラウス (『雲の地図』)

サラリーマン生活の昼休みに生地を買い、休日に仕立てては、それを着て働く。健全な衣生活のいとなみである。

しかし、同じ生地を詠んだ歌でも、次のような歌はまた、趣を異にする。

逆巻きて危ふき海を思ふ日にジャワの更紗の布は届きぬ (『花溢れみき』)

わがために織るとし聞けばいまだ見ぬオーロラのごとし一枚の布 (『野分の章』)

印度更紗の布を裁たむか目に見えてはかどる仕事こよひはしたく (『風水』)

防虫加工してあるといふ布を裁つ新しきものにもなじみてゆかむ (『風水』)

イタリアの厚地の絹も古びしに着れば落ちつくブラウスのあり (『風水』)

民子が洋裁に長けているのは周知のことで、さまざまな生地を贈ってくれる人もあったようだ。

掲出 1 首目の「ジャワ更紗」はバティックとも呼ばれる、インドネシア原産の木綿のプリント地である。「逆巻きて危ふき海を思ふ日に」という設定は、ややストレートすぎるかもしれ

れない。しかし、海を渡って届いた、いかにも南洋の風情に満ちた生地には、このように詠ませる力があるのだろう。

2 首目は贅沢なことに、民子のために布を織ってくれるという。「いまだ見ぬオーロラのごとし」という比喩の、なんと美しいことだろう。夜空を見上げて想像をふくらませている、ひとりの乙女の姿が見えてくる。

3 首目と 4 首目は、裁断の場面である。3 首目は早く裁って、「目に見え」るように仕事を進め、自分を納得させたいという。そうすることによって忘れたい何か、胸中にあるのかもしれない。

4 首目は、防虫加工された新しい生地に対して。デザインを決め、型紙を置いて、いよいよ鋏を入れるのが裁断である。どんなに手慣れた人にとっても、裁断の場面には、いくばくかの高揚感があるだろう。そんな心情を、「新しきものになじみてゆかむ」という決意と響き合わせることで、民子は自らを励まし、心の位置を引き上げようとしているのかもしれない。

5 首目はすでに着古したブラウスである。「イタリアの厚地の絹」とはどんな柄なのだろう。元埼玉県立文書館館長の関根敬一郎は、浦和図書館勤務時代の民子（菅野民子）について、次のように書いている。

あるとき階段を降りて行く菅野さんとすれちがい、その日着ておられたスーツがエメラルドグリーンの蔓模様であったためかくうっかりするとその渦に巻き込まれてしまいそうですネ」と言ったら、企みに成功したかのようにカラカラと笑われていた。たしか『石の船』の口絵写真のものがそれである。大柄でいながら軽やかな举止をなさる菅野さんは、とても家庭的でご自分の着るものは何でも（妹さんのものも）裁ってしまわれるとのことであった²³⁾。

関根の問いかけも大胆だが、それに対して「企みに成功したかのようにカラカラと笑」う民子も負けてはいない。たとえば、何か重要な会議があって、そこでどうしても自らの提案を通したい、といった状況が想像される。関根のいう『『石の船』の口絵写真』が、図 1 である。



図 1 「東京九段にて」(昭和47年(1972)3月)

大西民子『石の船』現代歌人叢書31 短歌新聞社 1975年

(不鮮明なモノクロ写真であるため、エメラルドグリーンか否かは特定できないが、蔓に花のからんだ、全体模様が見てとれる。

緑色の生地に関連する歌としては、『花溢れるき』¹¹⁾に、「人ひとり忘れ得べしや濃みどりの服地探して街をゆく日も」がある。)

民子が縫っていた服を回想して、北沢郁子は、「だいたい柔らかい生地の柄物で、ツーピースに仕立てて、ボーで結ぶスタイルが多かった。無地ものは身幅を広く見せるから柄物がよ

く、ポーは胸前をかくしてすっきり見せるというのであった。」²⁴⁾と書いている。

掲出の5首目において、民子が「着れば落ちつく」と詠ったブラウスの、「イタリアの厚地の絹」はどのようなものだろうか。イタリアらしくカラフルでありながら、しっとりとした艶のある、おしゃれな柄物が想像される。

ある時は「企み」を「成功」させるために、人心を渦に巻き込むような、色柄ともに大胆な蔓模様を着る。そしてまたある時は、すこしでも身幅を細く見せるために、柄物の生地を選ぶという。生地に対する思い入れも、一筋縄ではいかない民子である。

本項では、糸、針、生地まつわる歌について考察してきた。家族のために、また自らのために、生地を選び、糸を選び、デザインを考え、型紙を整え、裁断して縫い、あるいは編み、1着の服を仕立ててゆく。そのすべての過程を歌材として民子が紡ぐ歌は、民子の血肉と交わっているのであった。

2 時代の読める歌

(1) 和裁から洋裁へ

膝とどて竦める如き日のわれを不意に來し母に見せてしまひぬ (『まぼろしの椅子』)

民子は『自選100歌選一大西民子集』⁷⁾の中で、この歌をとりあげている。民子が埼玉県の大宮に住み、母と大学生の妹は岩槻に住んでいたころの歌である。当時、帰らぬ夫を待つ民子を案じた母は、よく訪ねて来て、「浴衣が縫いあがったよ、と言って届けてくれたり、里芋がおいしく炊けたから、と言って持って来てくれたりした」²⁵⁾という。その後の歌集には、次のような歌もあった。

何気なく聞きすごせしが身に沁みぬわが単衣母が縫ひゐるといふ (『不文の掟』)

亡き母の縫ひ残したる裾を綴ぢいつまで脆きころと思ふ (『無数の耳』)

浴衣を縫って届けてくれた母は、「単衣」も縫っている。ここでいう「単衣」は、浴衣以外の、裏のない単衣の着物のことだろう。母が民子のために縫ってくれるのは、もっぱら和服のようだ。掲出の2首目では、母亡きあと、縫い残した着物を民子が縫っている。単衣の着物の裾は「紵け」るので、「綴ぢ」といえば裕である。裕の着物の、裾の襷の幅を固定するために、小さな針目で縫うのである。和裁は母から教えられた可能性もあるが、民子は高等女学校の授業で基本的な和・洋裁を習っているのだから、裕の裾を綴じるくらいは簡単にできただろう。

しかし、日ごろの民子は、もっぱら洋服を縫っている。母の和裁から、ミシンを駆使した民子の洋裁へ。時代の流れは明らかであり、民子の歌からも、日本の家庭裁縫の変遷の縮図を読みとることができる。

(2) 洋装店と家庭洋裁

第二次世界大戦後の日本では、洋装化が急速に進んだ。洋服の調達方法は、洋装店、あるいは

は百貨店で注文するか、自分で仕立てるかのどちらかであった。そこに昭和30年代の後半より、既製服を購入するという選択肢が加わるのである。

洋装店については、民子に次のような歌がある。

洋装店に住みこめる教へ子の今日の手紙徒弟制度の暗き雰囲気を伝ふ（『まぼろしの椅子』）
「教へ子」とは、岩手県立釜石高等女学校教諭時代に、民子が受け持った生徒である。そんな少女たちも、洋装店に住み込みで就職する時代であった。

津村節子が自らの半生をモデルに著した小説、『星祭りの町』が思い出される。そこには、終戦後まもなく、埼玉県の入間川の町に開店した小さな洋裁店に、「中学を出たばかりの小柄な少女」が見習いに入り、2人めの従業員として働き始める様子が描かれている。洋裁店とは、洋装店よりさらに規模の小さい店で、洋装店の下請けも担っていたようだ。「初めのうち店の片付けや掃除、お使いなどをさせながら、実地にスナップ付け、ボタン付けから教えて、まつりや穴かがりなどははぎれを与えて宿題にした」²⁶⁾ というのであった。参考に、東京における洋裁店の数は、昭和18年（1943）の1300店舗から、30年（1955）には15000店舗へと、戦後の10年で急増している²⁷⁾。

民子と同じ大正13年（1924）生れの歌人、三国玲子は、戦後すぐに、じっさいに洋裁店に勤務し、その後自宅で洋裁の仕事をした人である。三国の第一歌集『空を指す枝』²⁸⁾には、そうした仕事にまつわる歌もある。

洋裁を修めし後のことを言えど確信あるといふにもあらず （『空を指す枝』）

裁屑を売って求めし水菓子に集いては又ミシンにむかふ （『空を指す枝』）

経済的にも、精神的にも、厳しい状況が詠われている。民子の「教え子」や、『星祭りの町』の「小柄な少女」も、「徒弟制度」の枠の中で、こんな水菓子に集っては、ささやかな安息を得ていたのかもしれない。

一方、同じ時期に、自分で洋服を仕立てようとする女性たちの間では、家庭洋裁のブームが巻き起こっていた。日本ミシン協会の調査によれば、昭和35年（1960）には、日本全国総世帯の72%がミシンを所有していた。家庭用機器のうちでは、ラジオ（89%）に次いで、ミシンの普及が進んでいたのである²⁹⁾。

ミシンに関する民子の歌には、次のようなものがある。

行き交ひの静かなる日と気づきたりミシンのあとを片付けてみて （『雲の地図』）

今はただミシンを踏まむ石ころのやうにころがり落ちてもゆけず （『雲の地図』）

巻くときの機械の力一瞬に解けて螺旋をなすカタン糸 （『野分の章』）

ひたすらにミシンを踏む。物づくりに没頭することは、ひととき全てを忘れさせてくれる、救いでもあっただろう。掲出の3首目の「カタン糸」は、木綿のミシン糸のこと。ミシンの下糸のボビンを巻くときに、何かの加減でゆるんだ糸が、螺旋状にほどけたのである。ミシンを使う者には誰しも経験のあることだ。あっと思う、その「一瞬」が切り取られた。こうした臨場感あふれる歌をまじえることで、民子の歌は、読者にとってますます身近なものとなる。

戦後まもないころからの、洋裁学校の授業再開や創設、相次ぐファッション誌の復刊や創刊も、家庭洋裁のブームを牽引していた。具体的には、昭和21年（1946）1月にドレスメーカー女学院が、同年9月には文化服装学院が授業を再開している。ファッション誌については、21年（1946）に伊東茂平が戦後初のスタイルブックを刊行したのに続いて、翌22年（1947）に「装苑」復刊1号が刊行され、24年（1949）には「ドレスメーカー」が創刊された。

井上雅人著『洋裁文化と日本のファッション』には、当時のファッション誌に関する、綿密な研究結果が著されている。それによれば、昭和32年（1957）時点での主なファッション誌の発行部数は、「装苑」35－40万部、「婦人画報」16万部、「ドレスメーカー」15万部、「スタイル」12万部、であったという³⁰⁾。

女学校で洋裁の基本を学んでいた民子は、ミシンを使いこなし、さらに、豊富に出版されていたファッション誌から、容易にデザインや型紙を得ることが出来たのである。

（3）デュフィとスカート

大西民子の歌には、多くの画家や絵画が登場する。それらについては、石川朗によって詳細な調査・研究がなされ、特に、ムンク、クレー、ゴッホ、ルオー、モネとの関連が明らかにされている³¹⁾。ここで注目する画家はデュフィである。デュフィは『まぼろしの椅子』に1度しか詠われておらず、石川も論じていないが、服飾との関連においては重要な存在である。

陽の戻れば忽ちデュフィの海となりスカートをふくらませてわれも佇つ（『まぼろしの椅子』）
「潮鳴り」というタイトルの一連、9首における、冒頭の1首である。

ラウル・デュフィは、20世紀の前半にフランスで活躍した画家であり、「地中海のコバルトブルーよりはるかに深い」と称される、「碧青」を生み出したことで名高い。実際、デュフィには海の絵が多く、それらは逞しく、明るい光に満ち、生きる喜びを感じさせてくれる。

さらにデュフィは、画業と並行して、木版画や陶芸など多岐にわたる仕事をしており、その1つにテキスタイル・デザインがあった。年譜によればデュフィは、1910年ごろ、デザイナーのポール・ポワレと出会っている。ポワレといえば、20世紀の女性をコルセットの拘束から解放した伝説のデザイナーである。2人は一時期、共同でパリのクリシー大通りにテキスタイルの製作所を設立し、1920年ごろには、デュフィがクロッキーに描いたポワレのドレスが、当時のモード雑誌の誌面を飾っていたという。ポワレの自伝『ポール・ポワレの革命 20世紀パリ・モードの原点』には、デュフィの木版プリント地を用いてポワレが製作したマントなども紹介されている³²⁾。

そこで、当時の日本のファッション誌の中で、最も発行部数の多かった「装苑」をひもといてみる。すると、『まぼろしの椅子』刊行の3年前、昭和28年（1953）の「装苑」5月号の「折込口絵」には、デュフィの絵画作品「競馬の出発前」がカラーで掲載され、美術評論家の今泉篤男によって、「フランスでも、競馬は馬の競争よりも、それを観に来る人たちの風俗の、第一流の流行を競うファッション・ショウの観があった」³³⁾という解説が書かれていた。図



図2 デュフィ「競馬の出発前」
「装苑」1953年5月号 折込口絵



図3 デュフィ
「シャクヤク」



図4 大西民子
(1960年頃)



図5 大西民子
(1988年)

2がその「折込口絵」であり、図3はデュフィの展覧会のカタログから転載したテキスタイルデザイン、「シャクヤク」³⁴⁾の部分である。同書には、薔薇、カーネーション、蝶、松の葉、鸚鵡、バイオリン、鱗など、民子が好みそうな柄が多く見られた。

図4と図5の写真は、どちらも『青みさす雪のあけぼの一大西民子の歌と人生』³⁾の「大西民子アルバム」から転載したもので、同書に収められた民子は、ことごとく柄の服を着ている。柄物の生地を好む民子の嗜好については、先の1 - (2)でも触れた通りである。

民子は日常、洋裁や編みものに親しんでいたことから、デュフィとファッションとの関連を知っていた可能性は高い。そしてそのテキスタイルデザインは、まさに民子の嗜好と合致している。

以上のことを考え合わせた上で、掲出歌（陽の昇れば忽ちデュフィの海となりスカートをつくらませてわれも佇つ）を再読すると、「デュフィの海」から「スカート」への展開は必然性をもって納得できる。

さらにもう一步踏み込めば、「デュフィの海」は、民子の希望の象徴のようにも思える。掲出歌の下の句に見えるのは、デュフィのドレスをまもって、新時代を謳歌する美しい女性たちと同様、自らもスカートをふくらませて海と対峙する、民子の姿である。海風を受けて民子がふくらませたスカートには、民子の前向きな意志がこめられている。それは、民子が第一歌集『まぼろしの椅子』の「あとがき」に、「この歌集を踏み石の一つともして未来を切り拓いてゆく決意が、醸成されつつある」と記した心情にも、通じるものと思われる。

IV おわりに

大正13年（1924）に盛岡市で生れた大西民子は、幼少期から少女期を振り返り、服飾にまつわるさまざまな思い出を詠んでいる。

亡き父のマントの裾にかくまはれ歩みきいつの雪の夜ならむ （『花溢れぬき』）
 こうした無邪気な子ども時代もつかのま、民子の生活にも、戦争が影を落すようになる。
 毛皮もて耳を覆へる写真など出で来て戦争の記憶を返す （『風水』）

てのひらに何の疲れか残りをり軍服のいろの夢より覚めて (『風の曼荼羅』)

民子が盛岡高等女学校に入学したのは昭和12年(1937)、盧溝橋事件を機に日中戦争が始まった年であった。それが第二次世界大戦へと拡大した16年(1941)、高等女学校を卒業した民子は、奈良女子高等師範学校に入学している。

丸衿の紺の制服幾何を好む少女のわれはいづこへ行きし (『花溢れみき』)

スカートのひだをたたみて寝押しすと余念なかりし夜毎の少女 (『風の曼荼羅』)

戦時色の濃くなる中、未来に希望を持ち、年ごろの娘らしく身だしなみに気を配り、夜毎の「寝押し」もおこたらない少女であった。

そんな民子は戦後、結婚・離婚を経て、肉親を相次いで亡くすといった不幸を乗り越えながら、地方公務員として、定年退職の日まで職務を全うしたのである。

身に課する禁句の幾つ事務服を脱ぐ夕べにてかなしみ深し (『不文の掟』)

事務服をロッカーにしまひその奥に脱ぎたる顔の一つもしまふ (『花溢れみき』)

職場のロッカーの奥に脱いだ「顔」には、その時々で、異なるたくさんの種類があったことだろう。同僚の顔、上司の顔、娘の顔、姉の顔。そのひとつが「歌人」の顔であり、またひとつが「ものを縫い、編む人」のそれであった。

本稿では、歌人大西民子と服飾との接点に焦点をあてて、短歌作品を読んできた。その結果、民子の服飾観の根幹にあるのは、自らが装う喜びと、人に着せる喜び、その2点であることが明らかになった。それは、民子が生涯、時間をかけてものを縫い、編むことを続ける過程で自然に身についた、実感であったと思われる。その一方で、民子にとって、ものを縫い、編むことは、心を解き放つ手段であり、現実の試練をひととき忘れ、幸せだった過去の時間へ帰る縁であり、心を落ち着かせる術でもあった。また、そうしたもろもろの思いを託すのに重要な歌材が、糸・針・生地といった材料や道具だったのである。

そして、それらを詠い続けた民子の営みは、はからずも、第二次世界大戦をはさんで、日本の女性が和装から洋装へと衣生活の軸を大きく転換し、その後の家庭洋裁のブームへと移行する、時代の縮図を示すものでもあった。

「短歌」という詩型はいかにも小さく、また、一歌人の歌業はささやかなものである。しかし、この時代に、実際に技術に長けた歌人が、ここまで実感を持って詠い続けた歌群は類を見ない。服飾史の一隅に、史料として残しておきたいと思う。

来む世には誰にスカーフ編むらむかこの世に見にし人も忘る (『光たばねて』)

民子の遺歌集に収められた一首である。今ごろは岸の向こうで、再会した母のために、または妹のために、美しいスカーフを編んでいるのではないだろうか。

【註】

- 1) 『大西民子全歌集』 沖積舎 1989年
- 2) 大西民子の逝去を悼んで、「短歌研究」短歌研究社 1994年3月号・4月号、および「短歌」角川書店 1994年5月号 など、多くの短歌雑誌に「追悼特集」が組まれた。
- 3) 原山喜玄編『青みさす雪のあけぼの—大西民子の歌と人生』 さきたま出版会 1995年
- 4) 有本俱子『評伝大西民子』 短歌新聞社 2000年
- 5) 「特集 大西民子没後20年」『現代短歌』現代短歌社 2014年2月号 pp13-68
- 6) 北沢郁子「たれに似し」『青みさす雪のあけぼの—大西民子の歌と人生』³⁾ p60
- 7) 大西民子『自選100歌選—大西民子集』 牧羊社 1986年
- 8) 大西民子『まぼろしの椅子』 新典書房 1956年 第一歌集。1949年から55年までの作品、486首を収録している。
- 9) 大西民子『不文の掟』 四季書房 1960年 第二歌集。1956年から60年前半までの作品、453首を収録している。
- 10) 大西民子『無数の耳』 短歌研究社 1962年 第三歌集。1960年後半から65年までの作品、600首を収録している。
- 11) 大西民子『花溢れみき』 1971年 短歌研究社 第四歌集。1966年から70年までの作品、626首を収録している。
- 12) 大西民子『雲の地図』 1975年 短歌新聞社 第五歌集。1971年から74年までの作品、627首を収録している。
- 13) 大西民子『野分の章』 1978年 牧羊社 第六歌集。1975年から78年前半までの作品、488首を収録している。
- 14) 大西民子『風水』 第七歌集。『大西民子全歌集』¹⁾ に収録。作品は、1978年から81年までの624首。この歌集により、第16回逍空賞受賞。
- 15) 大西民子『印度の果実』 短歌新聞社 1986年 第八歌集。1982年から85年までの作品、274首を収録。
- 16) 大西民子『風の曼荼羅』 短歌研究社 1991年 第九歌集。1986年から91年前半までの作品、458首を収録。この歌集により、第7回日本詩歌文学館賞受賞。
- 17) 大西民子遺歌集『光たばねて』 1998年 短歌新聞社 第十歌集。1991年5月から94年2月までに、諸雑誌・新聞等に発表した作品、261首を収録。
- 18) 木俣修「神々も濁く夜あらん」『大西民子全歌集』¹⁾ 「葉」 p6
- 19) 加藤克己「大西民子そして大西短歌」『青みさす雪のあけぼの—大西民子の歌と人生』³⁾ pp51-53
- 20) 吉野昌夫『大西民子全歌集』¹⁾ 「解題」(『無数の耳』について) p544
- 21) 「引力のやさしき日なり黒土に輪をひろげゆく銀杏の落ち葉」の自解文の冒頭。『自選100歌選—大西民子集』⁶⁾ p88
- 22) 芳賀明子「図書館での日々」『青みさす雪のあけぼの—大西民子の歌と人生』³⁾ p98
- 23) 関根敬一郎「菅野さんへのオマージュ」『青みさす雪のあけぼの—大西民子の歌と人生』³⁾ p73
- 24) 北沢郁子「たれに似し」『青みさす雪のあけぼの—大西民子の歌と人生』³⁾ p59
- 25) 『自選100歌選—大西民子集』⁷⁾ p10
- 26) 津村節子『星祭りの町』 新潮社 1996年 p191
- 27) 日本統計協会編『日本長期統計総覧』第1巻 日本統計協会 1987年 p172
- 28) 三国玲子『空を指す枝』 1954年。『現代短歌全集』第12巻 筑摩書房 1980年に収録。
- 29) 日本ミシン協会ミシン産業史編纂委員会編『ミシン産業史』 日本ミシン協会 1961年 p7
- 30) 井上雅人『洋裁文化と日本のファッション』 青弓社 2017年 pp151-152
- 31) 石川朗「定本・大西民子のうたと絵画」(2007年)の改訂版として、インターネット上に公開されている「大西民子のうたと絵画」(2013年) (<https://blogs.yahoo.co.jp/kaisizu80>) に、大西民子の短歌と絵画との関連が詳しく論じられている。

- 32) ポール・ポワレ著 能澤慧子訳『ポール・ポワレの革命20世紀パリ・モードの原点』文化出版局 1982年 p149
- 33) 「装苑」文化服装学院出版局 1953年5月号「折込口絵」R・デュフィ「競馬の出発前」／今泉篤男「折込口絵解説—ラウル・デュフィ「競馬の出発前」」p47
- 34) 「シャクヤク」絹地に手刷りしたもの。製作年は1911-12年。『ラウル・デュフィ 美、生きる喜び』展覧会図録 ラウル・デュフィ出版委員会 2006年 p55